

4.参加するからこそできる経験 「ほんわか食堂」へのボランティア活動を経て

小島里央

本稿は、ほんわか食堂が子どもたちに行っている簡単な調理経験が子どもに何をもたらすのか、また参加している全ての人が子ども食堂で何をすることができるのかという点に焦点を当てる。これにより、子どもは野菜やフルーツなどを包丁で切ったという達成感と喜びを味わうことができること、また、参加しなければ、会うことがなかった人間関係を築くことができることを明らかにする。

1.始めたきっかけ

ふれあいビレッジで子育てサロンを4、5年やった経験があることと、名南病院の周辺は低所得者が多く、何かやらないといけないという思いがあったことである。小児科の先生と話をし、やりたいと言う思いが強くなった。本当は2016年の夏からやりたかったのだが、他のところの情報を得ると、食事以外の支援をしているところもあり、あれこれやらなければいけないと思うと、なかなか踏み込めなかった。やるからには、やり続けなければならないという思いがあった。子どもにごはんを食べさせることから始めればいいのかと思い2016年12月にスタートした。活動目的のメインは貧困対策だが、その目的を前面に出すことはしてはいけない。本当に食事をする場所が必要な子に支援していくためには普通の家庭の子ども達にも来てもらわなければならない。地域を巻き込む感じでやっていけばいいと思い始まった。

代表：松土敏子さん

名南健康友の会

名南会：名南病院、名南ふれあい病院、老人保健施設かたらいの里、名南診療所、中川診療所、名南在宅総合センターきずなどといった施設をもつ組織であり、「いのちの平等」のもとに、無差別平等の医療、介護を掲げる全日本民主医療機関連合会に加盟している。また、名南病院・ふれあい病院は無料の低価格診療事業を行っている。

2.これまでの開催日時・メニュー・食事以外のプログラム

第1回 2016/12/27

カレーライス、サラダ、デザート

第2回 2017/1/28

ミートと和風おろしの2種類のパスタ、ミートボール、サラダ、デザート

第3回 2017/2/18

唐揚げ丼、スープ、サラダ、フルーツ

第4回 2017/3/18

ロコモコ丼、味噌汁、デザート

第5回 2017/4/15

カレーライス、温野菜、フルーツ

第6回 2017/5/20

から揚げ丼、豚汁、白玉入りフルーツポンチ

白玉粉を丸めて白玉づくりをした。星型やハートの形の白玉など思い思いの大きさや形の白玉を作り、鍋の中に入れて自分たちで鍋の中から取り出し氷水の中に入れてもらった。

第7回 2017/6/17

しょうが焼き、味噌汁、ポテトサラダ、フルーツ

名南病院の患者さんの奥さんが、ボランティアとして紙芝居となぞなぞをしに来てくださった。

第8回 2017/7/15

キャベツメンチカツ、サラダ、ミネストローネ、フルーツ

フルーツ、野菜のカット

第9回 2017/8/6

煮込みハンバーグ、温野菜、冬瓜汁、フルーツ

フルーツのカット、きのこのソテー作り、お菓子流し

中京テレビの撮影とインタビュー

第10回 2017/9/16

豚丼、温野菜、味噌汁、フルーツ

フルーツ、野菜のカット

第11回 2017/10/21

ハヤシライス、サラダ、フルーツ

フルーツ、野菜のカット

第12回 2017/11/18

ドライカレー、サラダ、クリームスープ、フルーツ

フルーツ、野菜のカット

第13回 2017/12/27

鶏のクリーム煮、温野菜、スープ、ご飯、ケーキ

大府市にある『マリーヌ洋菓子店』がスポンジを寄付してくださったので、クリスマスケーキも兼ねてケーキのデコレーションを行った。6～7人でひとつのケーキを作り、クリームやフルーツをのせるまですべてのことをしてもらった。

第14回 2018/1/20

ポテトサラダの豚肉巻きと野菜巻き、温野菜、レンコンのきんぴら、味噌汁、フルーツ野菜のカット

メニューは毎回、松土さんと料理長で決めている。そして、中央卸売市場の丸子青果は、野菜などを寄付してくれる。そして、はっきりと名前はわからないが、お米は新潟県の農家さんから300キロをいただき、他の子ども食堂に分けた。また、名南病院のドクターからの差し入れや、知り合いから少し野菜の差し入れをしてもらった。(株)クレストから豚肉や卵の寄付もしてもらった。第13回で作ったケーキは、大府市にある『マリーヌ洋菓子店』が寄付してくれた。そして、12月27日でほんわか食堂は一周年を迎えた。記念ということでボランティアさんの知り合いの地域の方がクッキーをたくさん作ってくれた。また、名南病院の患者さんが巾着袋をたくさん作って寄付をして下さり、そしてソラッコという幼稚園がしおりをたくさん作って寄付してくださったので袋の中にしおりとあめとマシュマロを入れて子ども達にクリスマスプレゼントとして配った。

3.参加者の人数

第1回 子ども14人、大人24人

第2回 子ども26人、大人27人

第3回 データなし

第4回 子ども27人、大人6人、ボランティア26人

第5回 子ども41人、大人12人、ボランティア26人

第6回 子ども40人、大人21人、ボランティア20人

第7回 子ども43人、大人8人、ボランティア25人

第8回 子ども35人、大人10人、ボランティア33人

第9回 子ども41人、大人13人、ボランティア17人、メディア3人

第10回 子ども27人、大人13人、ボランティア24人

第11回 子ども29人、大人16人、ボランティア20人

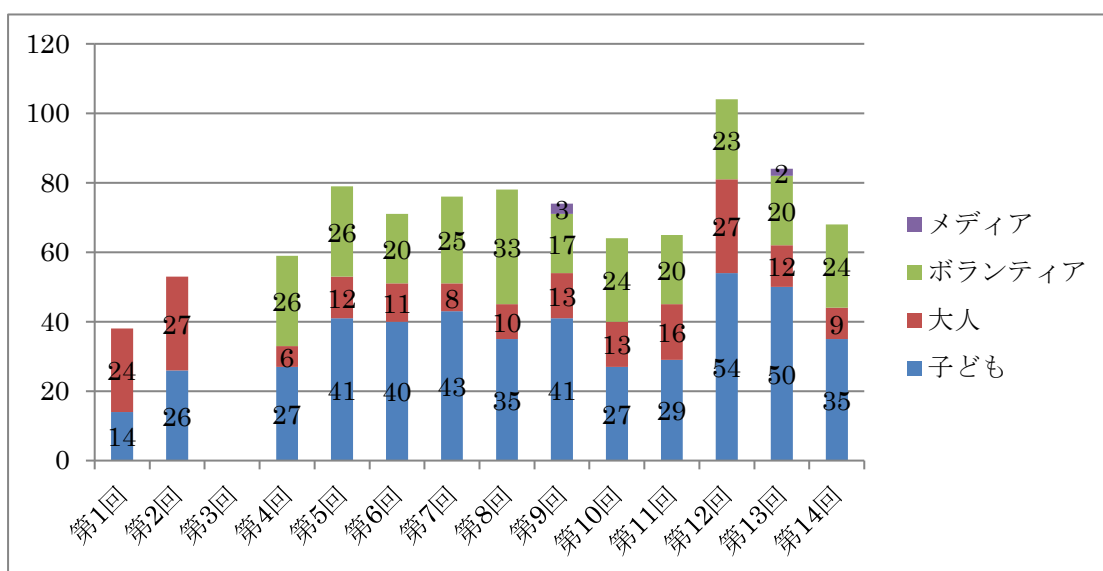
第12回 子ども54人、大人27人、ボランティア23人

第13回 子ども50人、大人12人、ボランティア20人、メディア2人

第14回 子ども35人、大人9人、ボランティア24人

開催当初は、人数も少なかったが、安定してくるにつれ、子どもの参加は40人前後、大人の参加は、10～15人前後が多い。ボランティアは続けて参加している人がとても多い。第10回と第11回は、台風や雨の関係で参加者が少なかった。しかし、第12回は、テレビで取材をしてもらった効果や、クチコミで参加者が初めて100人を超えた。第14

回は、参加者が多い道徳小学校が学校開放日だったため、子どもがいつもより少なかった。また、ボランティアの中には、中京大学の学生を含め、毎回他大学の学生も来るため、大学を超えた交流もできる。第9回では、中京テレビの『キャッチ』という番組が取材に入り、参加者にインタビューをしに来た。第13回では、新聞社2社（中日新聞、南区ホームニュース）が取材に来た。



グラフ1：ほんわか食堂参加者別グラフ

4.参加者の居住地・学区

道徳学区に住んでいる人がほとんどで、道徳小学校の子どもが多い。また、ほんわか食堂を東築地でも行うことから、東築地小学校の子供が多い。豊田小学校の子どもも他の学校よりは少ないが何人か来る。交通手段は徒歩や自転車である。子ども達は、友達同士で誘い合ってくることが多い。家族連れも回を重ねるごとに増えているように感じる。幼稚園生といった小さい子どもの保護者同士はお互い顔見知りであるように感じる。

5.地域に根付かせるための課題

野菜などの寄付がとても多い。参加費を次回開催するためのお金として使っている。また最近では子ども食堂に参加している人全員が加入できる保険（社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会の保険）に入った。クチコミも増えて、回を重ねるにつれて参加者も増えてきたが、今の名南病院の講堂では参加者がゆったり過ごすには限界があるように感じる。食べるスペースの確保、遊ぶスペースの確保が少なくなり、それぞれ区切られているわけではないため、食べている人の近くで遊ぶなど少し危ないようにも感じる。ご飯を食べたら、帰る子どもも何人かいるが、終了時間まで遊んでから帰る子どもがほとんどなので、走り回る子どもがいると結構危険である。また、病院内の会場のため自由に出入りすることができる。ボランティアはほとんどが女性のため、防犯の安全面に少し欠けているよう

に感じる。

6.課題を解決するための取り組みや工夫

子ども食堂終了前にアナウンスで次回の開催案内をして、受付の際に書いてもらった住所に手書きのはがきを送るなどしている。名南病院周辺は、低所得者が多い。だが、貧困対策をメインに行っても、それを前面に出すことはできない。家庭環境は様々であるが、どんな子どもにとっても「居場所」となるような場所になっている。また、地元の新聞である名南新聞にも載っていると聞いた。道徳小学校に許可を得て、チラシも配っている。

料理は、子どもたちが自分で好きなものを好きな分だけ食べられるというバイキング形式をとっている。プラスチックのトレーにプラスチックのお皿で料理を運んでもらうため、スープなどの汁物は、ボランティアの方で配ることになっている。食べ終わったあとも自分たちでお皿を運んでもらう。また簡単な調理を子どもたちに行ってもらい、包丁などに触れる機会を作っている。また、開催日はけがに備えて参加者全員が保険に入っている。

7.つながりマップ



図1：ほんわか食堂と人の関係

ほんわか食堂は、病院事務の方と名南健康友の会が主催となって企画から運営・調理を行っている。そして、調理は名南病院の調理師の方、栄養士の方も手伝ってくださる。子どもとの遊びや簡単な調理は学生ボランティアが行う。他の子ども食堂から見学に来る方も多く、民生委員や社協といった地方自治体の参加も多い。名南病院のドクターや看護師の方もご飯を食べに来て、余った野菜などを買ってくださる場合もある。SNS等での呼び

かけは行っていないため、道徳小学校の前でチラシを配る、参加者の口コミなどで広まっている。



図 2：ほんわか食堂の食材・物の寄付

食材は、丸小青果がたくさん野菜やフルーツを毎回寄付してくれる。それに加え、名南病院のドクターからも野菜の寄付をしてもらうことがある。(株)クレストは卵や肉の寄付をしてくださる。マリーヌ洋菓子店には、第 13 回で作ったケーキのスポンジを寄付していただいた。また、新潟県の農家の方から米を 300 キロ寄付してもらった。

物は名南病院の患者さんから巾着袋の寄付や幼稚園からしおりの寄付を第 13 回のクリスマス時期にいただき、子ども達にクリスマスプレゼントとして配ることができた。また、地域の方から、ほんわか食堂 1 周年記念でクッキーの差し入れもあった。

8. 考察：それぞれの参加者にとって子ども食堂は何か

「可愛い子には旅をさせよ」というように、子どものうちから多くのことを経験させることはとてもいいことだと考える。そのほんわか食堂での経験というのは、学校や習い事、家庭では簡単にできないことのように感じる。ほんわか食堂で子どもが経験し、得ることができるものは、調理の経験だと考える。親の手伝いをしている子もいるかもしれないが、調理されていない野菜やフルーツを自分自身で触って、友達同士で教え合いながら包丁を握って切る、そして自分たちで切った野菜やフルーツを自分たちで食べるというのは、学校や家ではどれかひとつは出来たとしても全部ができるのは、ほんわか食堂だけであると考え。調理を楽しみにほんわか食堂に参加する子どもたちはとても多い。幼稚園生はトマトのヘタを取るというだけでも自分が調理をしているという達成感や喜びというのはあるだろうし、小学生は自分で好きな野菜やフルーツを切って笑顔になっている。前回で切り方を覚えて次の回で同じ切り方の場合、子ども同士で教えあっている姿を見る

と、どんどん連鎖して行って、家でも簡単な調理をする子が増えると考えたと見ているだけでワクワクしてくる。家庭の事情まではわからないが、子どもにとって調理をするということは、親の手伝いではなくても一種の喜びであると感じる。また、嫌いな野菜があったとしても子どもに「自分で切ったから食べてみよう」という挑戦心をも芽生えさせてくれるのではなかろうか。

学年を超えての交流も回を重ねるごとによく感じられる。学校の休み時間だと、クラスの友達と遊ぶイメージが強い。ほんわか食堂では、調理を介して、大きい子が小さい子に教えることもある。また、第13回で作ったクリスマスケーキでは、初めて同士の子が人数合わせでペアになることもあった。その際に、自分もクリームを絞りたいはずなのに、小さい子に譲る姿などが見られた。ご飯を食べ終わった後も、みんなでかるたやホワイトボードに絵を書いている姿もよく見られている。

参加している保護者の方々も、子ども食堂でつかの間のひと時を過ごしている方も多いのではなかろうか。料理をするということは、とても労力があることであるように感じる。その数時間だけでも、料理をせずゆっくり過ごせることはいいことであるし、同世代の親とも親同士で交流ができ、情報交換等も行うことができる。

ほんわか食堂を主催してくださっている代表の松土さんは、人との関わり、今までにはなかった人間関係を得ることができたと言っていた。ほんわか食堂を始めると決めてから、いろんな人に支えられてやってきた。友の会のボランティアもたくさんいて、職員のボランティアも増えてきた。社協の方とも、以前までは多少の絡みはあり、様々なことができなかったが、今はみのり塾という学習支援も含めてとなり、親密になっている。そして学生ボランティアともたくさん知り合うことができた。今までは、年齢が自分より上の方と関わりが多かったが、若い学生とも関わりができて新鮮で楽しい。ほんわか食堂をはじめ、ネットワークも立ち上がり、他の子ども食堂の方たちの知り合いもたくさんできた。それは、食材を毎回提供してくださる丸小青果も同じである。港区でのほんわか食堂を通じて、港区の民生委員とも関わりを持つことができた。スクールソーシャルワーカーや、小学校の教頭先生もこのほんわか食堂を経て関わることができた。そして、子ども達と家族の人たちだけの子ども食堂ではなくて、ボランティアの方たちにとってもほんわか食堂が、良い居場所になっているように感じたと言っていた。松土さん自身も1年間で様々なことを勉強して、仕事でヘルスプロモーションに関わっているが、子ども食堂もヘルスプロモーションと繋がると思うと自分の仕事も楽しくなってくるとおっしゃっていた。

名南健康友の会をはじめ、ボランティアの方もとてもやりがいを持って参加しているように感じられる。集合時間よりももっと早く朝から準備をして下さり、片付けまで行なってく下さり、最後の振り返り会議では疲れの色が見えているが、それでも、子どもに笑顔で「美味しかった、ごちそうさま」と笑顔で言ってもらえて嬉しいなどの話をよく聞く。「孫が出来た気分が楽しい。」と言う話も聞いた。最近では参加者も増え大変だが、1年間行ってきたことが地域に定着しつつあることをとても喜んでいた。

そして、学生ボランティアが毎回6~7人と、とても多いのがほんわか食堂のひとつの特徴なのではないかと感じる。子どもは学生を含めて遊ぶことがほとんどである。男子だと、肩車といった力があることで、大変そうに感じられるが、女子だと絵や折り紙、恋愛

相談といったおしゃべりをする人が多い。月に1回しか会えない分、子どもも学生もたくさん交流をする。大学生になると、小学生と遊ぶなんてことは普段の日常では考えられない。小さい弟や妹ができたようで毎回参加できるのを、学生ボランティア自身嬉しく感じているのではなかろうか。

参加者すべての人ができる経験とは出会い、人と触れ合うということだと感じる。自分とは違う地域に住んでいる同世代の子ども、参加しなければ絶対に出会うことがなかった祖父母くらいの大人、同じ年くらいの子どもを抱えた親、月に1回しか会うことはできないが面倒を見てくれる大学生と、多世代に渡り出会い、関わることができる。すべての人が参加しなければ会うことができなかった素敵な経験だと感じる。この出会いというのは、普段、公園や道端で会ったとしても、きっと何も話すことはないが子ども食堂だからこそできる経験なのではないかと感じる。

子ども食堂では、子どもだけでなく、参加しているすべての人が、それぞれ違う形で様々な経験をし、得ることができる場だと考える。しかし、未だに子ども食堂には「貧困対策」というイメージが付きまとう。それは、「子どもにご飯を食べさせる場所」という考えを持っている人が圧倒的に多いからである。子ども食堂のイメージを変えることは難しい。だから、「子どもの居場所」というのに加えて、普段は簡単にできない非日常の「経験の場」というイメージが定着していけば、子ども食堂そのものの実態により近い姿として認知されるのではないだろうか。そして、参加したすべての人が自分の考えが変わる、そんな場所になっていけばいいように感じる。